8月号

昭和59年８月１日
編集／発行
岡崎市教育委員会

「どろんこと太陽は
みんなのともだち
よごしちゃだめよっていったって
よごすのは　子どもの仕事
今日もみんなどろんこ

たんぽぽの
子らよ
とおい
そらへ
まえ

（園庭の一隅に建つ
教育文化賞記念碑より）」

（裸で砂遊び　―　矢作幼）

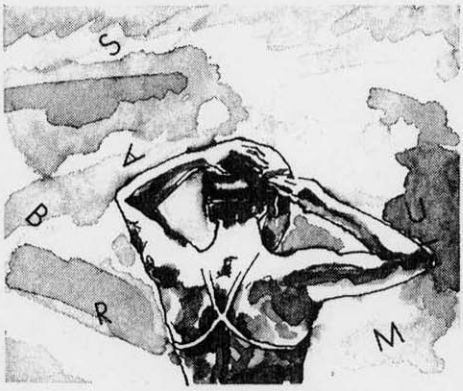
—教育随想—

教育の原点

二本松　聖順

よい蕾であれ
よい花が咲く
よい花であれ
よい実がなる

これは北九州市黒崎駅前の広場に建っていた少年の塔に刻んであった詩である。すでに半世紀も過ぎたが、未だに忘れられぬ感動の詩である。親が子に、教師が児童によせる切実な願いがこめられている。人間性豊かな、花も実もある人格の育成こそが教育の目的なのであろう。



〝人の一生は重荷を負いて遠き道を行くが如し〟この徳川家康公の遺訓は人のよく知るところであるが、家康公が二代秀忠公の妻女「おごう」の方に送った手紙「お文のうつし」は余り世に知られていない。これは秀忠公の長男七歳の竹千代、後の家光公と次男五歳の国松の家庭教育について諭したものである。その中に次のような文面がある。

一、植物が発芽したころは人が生れたと同じで、十分に気を使って育てなければなりません。一、二年たつと、枝葉も多くなり、支えの木をあてがえれば、素直に伸び伸びと育ちます。そのうちにじゃまな余分の枝が出れば、切り落とします。そのように手入れをすれば、後には立派な良い木になります。

二、幼いころは育てさえすればよいのだと思い、子どものなすまま言うままにして、一人前の年齢になってから、ああしなさい、こうしなさいと注意しても、わがままな性格は直るものではない。

〈岡田　弘　古文書現代語訳〉

思うに、人間は、生後五か月で脳の重さは二倍になり、七歳～八歳で大人の九十パーセントに生長し、二十歳で完成するというから、幼少年期の蕾の時代の教育が、生涯の運命を決定する要因であることを示唆している教訓であろう。しかし、仏教では教育の原点を人間の誕生以前においているところに特色がある。それを胎教というのである。

昭和五十七年一月十八日、NHK放映の科学ドキュメントを見たが、胎児は五か月になると母の子宮内で聞いた音を覚えている。例えば、夫婦が喧嘩をすると、その音を覚えている。それは、子宮内監視装置器でわかるということであった。

六十年前私の恩師大村桂巌先生は、教育学汎論を出版し教育と宗教という月刊誌を発行された。その時、私もお手伝いをしたが、先生はこの胎教の主張者であった。

胎児は受胎後、母の栄養によって肉体の生長をみると同時に、母の心によって胎児の心が育てられる。母の喜怒哀楽が胎児の心を左右するから、つとめて山紫水明の自然の風光に接し、美しい花を見、高尚な音楽を聴き、低俗な娯楽を避け、天地の恵みを感謝し、神仏を礼拝せよ。夫は妻が身ごもったら、万事につき妻が平安な日を過ごせるよう協力せよと教えられた。

そして、先生自ら奥様の姙娠以後は夫婦の肉体的交わりを絶対にしないと極言されていた。教育者としての厳しい姿勢であった。頂門の一針となれば幸いである。

（大樹寺貫主）

自己充実への取り組み

前甲山中学校長
浅井　浚一

「悔いのない夏休みを過ごすよう、しっかり計画を立てなさい。今日の仕事は明日へ延ばすな。」

教師は、子どもが相手であり指導を職と心得えて、つい一方的に命令を出す。日ごろの「忘れ物」指導にも、叱声を浴びせ罰則を与えたり、忘れ物の掲示表を作らせたりして、責め立てているのを見かける。それも学期始めならまだしも、学年末までも同様とあっては恥ずかしい。

夏休みを始めとする長い休みの生活のあり方は、日常の教師と子どもとの触れ合いに成る指導結果ともいえる。子どもの心に食い込み心を育むような、具体的な手だてが大切なものとなる。

実際、長い、しかも、暑さの厳しい夏休みを、大人である教師ですら、「納得できた」という体験がどれほどあったというのであろうか。日々に目あてを置いた自己充実へ向けての取り組みが、実りつ

保母四十年

中井　豊禅　氏

いつもだとすっかり取り入れが終わり五穀豊穣の祭り囃子が六名の鎮守の森から聞こえてくるはずなのに、戦時体制下では、人々は国を思い、専ら黙々と働き続けていた。

昭和十九年十一月、留守部隊を預っていた母親のために、中井さんは円通寺の境内で豊村託児所を開かれた。以来四十年、保育一筋に打ち込んでこられた中井さんは、当時を振り返りながら、柔和な顔で話された。

「昔、この辺りには田や畑が広がり、それは静かな所でした。お母さんたちはほとんど三竜社へ出かけていましたね。ある時、社長の田口東一さんが幼児保育の必要性を話されたので、生来、子ども好きな私は、東京の保母養成所を出て、すぐ開所に踏み切ったのです。二十七歳の若さでしたね。」

午後五時半近く、延長保育の子どもたちが親の迎えで、一人、二人と元気よく帰っていく。そんな子どもたちを見つめる中井さんは、終始にこやかである。

「そのころは今と違って、福祉が貧弱で職員は給料なしという状態が続きました。とにかくオルガン一台で始めた訳ですが、全く気違い扱いでしたね。それからは、師匠の『人間、一生の内、目から血の出る体験をしないと、一人前にならない』という教えを支えとして、四十年がんばってきました。」

整然とした職員室の奥まった一画に、大きな孔雀の絵が掛かっている。実にしっくりとした雰囲気である。中井さんは流暢に話を続けられる。

「そうね、今までで一番印象に残るのは、昭和十九年の三河地震の時のことです。『竹藪に逃げるんだ』と園児を引き連れて、避難を終えたと思ったら、一人いないんです。あわてましたね。どうしようかとあたふたしていると、その子が友達の靴を全部抱えて逃げてきたんです。いじらしさと言うか、責任感と言うか、大感激でしたね。」

園児十二名で始めた託児所も、昭和二十三年の児童福祉法制定によって保育所として認可され、順調な歩みを始めた。今では、二二五名を抱える社会福祉法人となり、二八四〇名の卒業生を送り出している。

この道四十年の経験を通した教育への願いは含蓄があり、説得力もある。

「自分中心のふるまいの多い今の子どもには先ず礼儀を第一に考えたいと思います。それには、先生も親も一体となって導く必要がありますね。いつの時代も大人が鏡ですからね。また、時間的なゆとりを持ち、もっと子どものびのびできるカリキュラムがほしいと思います。汲々と育てたくないですね。」

子どもに託する中井さんの思いは、いつまでも熱く燃え続けるにちがいない。

［生年月日　大正七年七月二十日
住　所　岡崎市六名二丁目九―四］

心身の鍛練を

広幡小学校長　伊豫田参吉

一昨年の夏休みに四日間座りつづけ、人間とは何か、何のために生きるかの疑問を問いつづけながら、真理の尊さをむさぼるように学んだことを思い出す。規格的日常生活から解放された心には、さわやかな余韻がいつまでも残っていた。

私にはたびたびとことん行き詰まって解決の糸口すら見出せない時があった。苦悩しながらも辛抱するうちに漸く道は開けてきたが、こういう苦しみからの救いの糸口は、夏休みに時々参加した三泊四日の精神の開発錬成会が大きな力になっていたことを思い出す。こうした意味からも、夏休みは、私自身を一回りも二回りにも大きく育ててくれた大切な時期であったと強く感じている。

目を外に向けると、物質的、物理的環境はすばらしく充実されている。意欲的に新しい試みを冒険することもできるであろうし、視野を広げる機会にも恵まれている。しかし、ここで肝要なことはこれを単なる外的環境の体験だけに終わらせず、内的環境である心身の鍛練にも目を向け磨きをかけることである。これができればすばらしい夏休みといえるだろう。つあらねば、心許さないものである。

子どもも教師も各々の立場から現実を顧み、己に価値あると思う幾つかを選び、計画・実行に移すことを大事としたい。

岡崎再見 48

金魚花火

一瞬の命はげしき大花火

章子

夜空を華やかに彩る花火は、夏の風物詩として、人々の心をとらえて放さない。一点の小さな火玉から四方八方へと飛び散る線香花火の繊細さ。赤、青、黄の大輪を咲かせ、見事に散っていく大筒の豪快さ。花火は古くから日本人の心を魅了し続けてきた。夕涼みの暗闇にぱっと咲き、はかなく消えていく一瞬に懐かしい心の郷愁を感じるのであろうか。

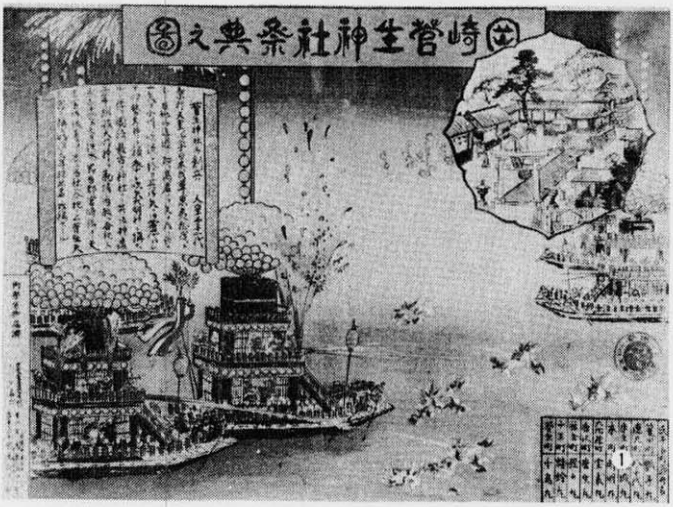
岡崎の花火作りは、今更言うまでもなく全国に名を馳せている。しかし、その歴史については諸説紛々として未だ定説はない。ただ岡崎の花火の技術が全国的に認められ、その特異性を堅持し得た最大の功績が金魚花火であったことはまちがいがないといえよう。

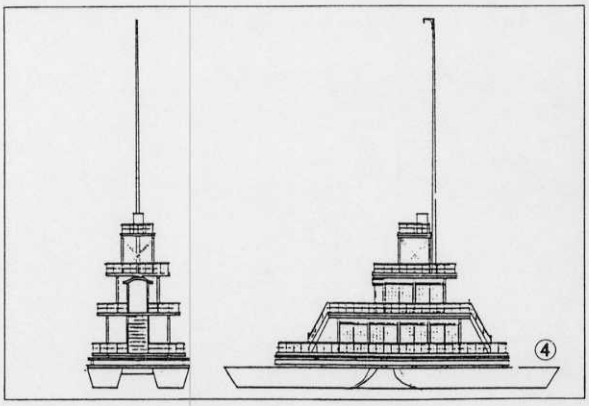
そのルーツは、古く文化文政の時代にさかのぼる。それ以前は打ち揚げ花火が全盛であったが、文政五年（一八二二年）、岡崎天王祭（今の菅生祭）に金魚花火が打ち込まれて以来、岡崎の花火に一大改革がもたらされたのである。当時、ほこ船三艘が日月を形どった提灯をともし、吹矢橋下まで上ってきた。屋台船の中では管絃を奏し、手筒を揚げ、金魚花火が水中を八方に遊泳し、川を火の流れと化したと聞く。

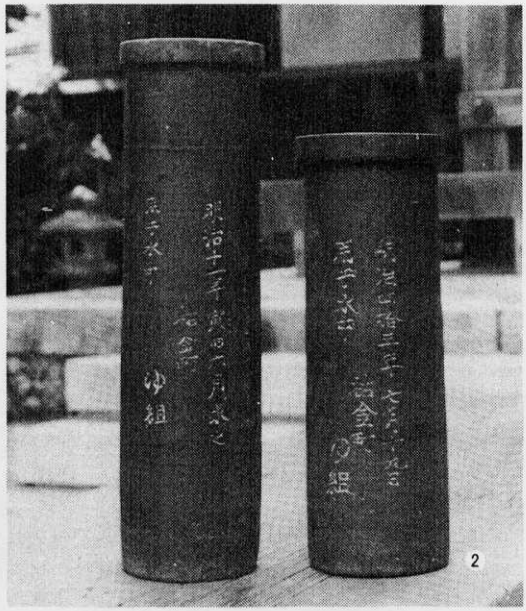
その後、数々の優れた煙火師たちによって改良がなされ、独特の水中花火を作り出していった。それが後の「錦魚花火」「銀魚花火」として完成していくのである。

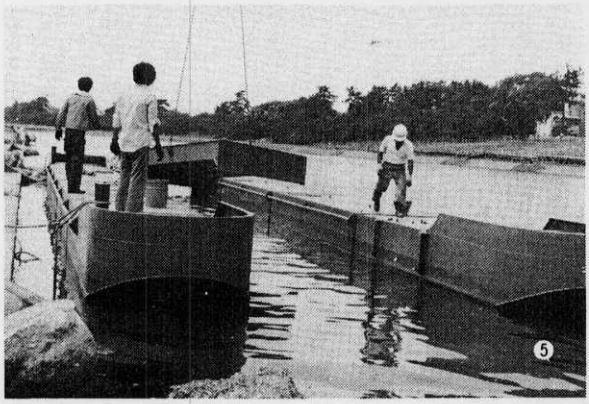
しかし、金魚花火の美しさゆえに、その伝承の秘密も厳しく、ほこ船から打ち込まれたのち即座に町内の若衆が水中に飛び込んで、そのガワ（薬きょう）を集め、他の町内の者には決して拾わせなかったという話も残っている。

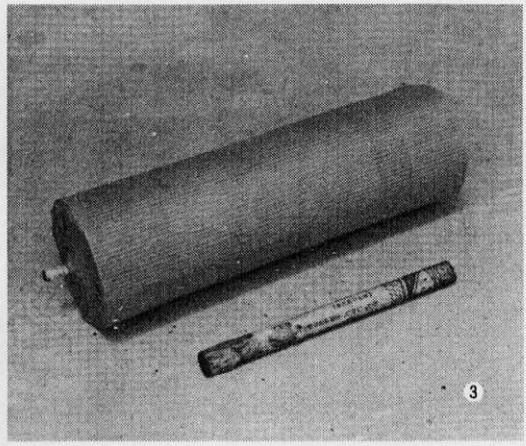
轟音とともに、美しく、そして雄壮に咲き広がる花火には、その一瞬にかけた数多くの煙火師たちの夢とあこがれ、喜びと悲しみがこめられていることを忘れてはならない。

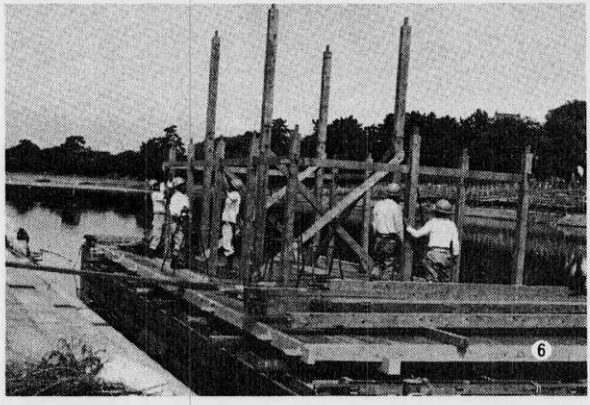


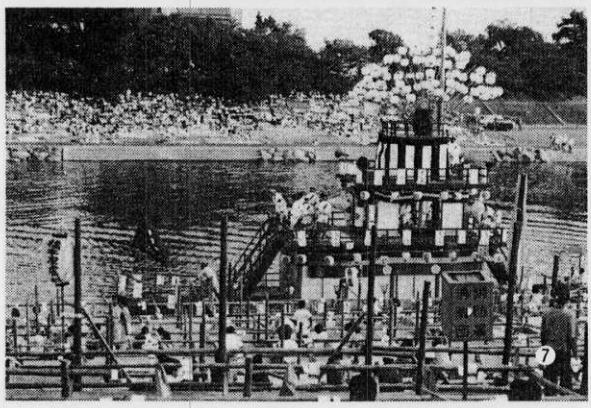












①ほこ船から金魚花火や大のし、手筒を打ち揚げている様子が描かれた大正十二年の菅生神社祭礼の絵図。
②菅生神社に保存されている明治十一年、四十三年製の祐金町ゆ組の金魚花火打ち揚げ用の銅製の筒。
③金魚花火作りは、二月から四月が「しこみ」の時期である。直径一センチ、長さ十二センチの紙の筒に硝石、硫黄、木炭の粉をつめる。さらに、鉄粉を加えたものが錦魚花火、アルミニウム粉を加えたものが銀魚花火になる。（写真下部の細い筒で、子という）これを、二十本親パイプに入れ、一個の金魚花火となる。
④現在のほこ船は三そう。一そうは木造船（神社に保管）図は、鉄製ほこ船の正面図と右側面図。
⑤⑥クレーンを使ってのほこ船組み立て作業。
⑦最上部は一年十二か月を表す十二個の提灯、次いで、三六五日を示す多数の提灯が半球状に飾られる。

教育日々

てんとう虫になった子

竜美丘小　玉腰　久恵

夕日にシルエットを浮かばせて、てんとう虫が眠っている。そんな写真を見て、K男がしんみりと言う。

「戦い疲れて、一人ぽっちで休んでいるんだよ。」

我が三年五組一の腕白坊主の言葉であるので、驚きである。この小さな虫への共感の言葉に、K男の日ごろの秘められた心のかっとうが透かし出された。

一昨日、子どもたちは、二十日余り心をこめて育ててきたてんとう虫の最後の一匹が、窓から飛び立つのを見送ったばかりである。

「クモの巣にひっかかるなよ。」などと声をかけていた。

子どもたちと、てんとう虫との出合いはコナラの木の観察から始まった。Y男が二、三ミリの黒い幼虫のかたまりのついたコナラの葉を見つけてきた。早速子どもたちはルーペでのぞきこんだり、図鑑で調べた。「クロナガタマ虫」という名前をこの幼虫に奉った。ところが、成長するにしたがって、黄色のはん点がでてきて、この命名の信用がぐらつき始めた時、S子が、

「アリマキを食べるてんとう虫の幼虫に似ているよ。」

と言いだした。そこで、教室で育てているアブラナの茎に止まらせると、そこに寄生しているアリマキを食べるではないか。

「本当にてんとう虫になるかな。」と、不安を抱きながらも、成虫になる日を心待ちにして、アブラナの世話を熱心にし始めた。

「先生、てんとう虫が殻をぬぎかかっているよ。」

と、大声で言うA男の言葉に、子どもたちは窓際のアブラナのそばに駆け寄った。子どもたちの期待は見事的中したのだ。

今はもう、アブラナにはさなぎのぬけ殻と、子どもたちの様様な思い出のみが残っている。

そういえば、さなぎからでたばかりの柔らかいてんとう虫に私がさわろうとした時、K男が

「先生、さわってはだめ。大事な羽根がこわれてしまう。」

と、語気を強めて言った。羽根が敵から身を守る大切な武器であることを直感的に見抜いていたのであろうか。てんとう虫を育てる間に懸命に生きる小さな命に自分を見たのであろうか。

コンクール雑感

東海中　藤江　敏夫

八月、ブラスバンド部員にとって、数少ない対外発表の場のコンクールが開催される。運動部の試合のように勝敗が明確ではなく、駆け引きや作戦もない。制限された時間の中で、練習してきた一曲に全力を注ぐ。だれかがファインプレーをして、ヒーローになることなどもない。

それぞれが曲の一部分を担当し様々にからみ合いながら、ひとつの響きをつくりだす。

本番のステージ。指揮台に立って、子どもたちの顔を眺める。いつもの平和そうな顔は、そこにはない。真剣というより、不安といった表情で、私を見つめている。タクトを挙げると、不思議なほど一斉に楽器を構える。息の詰まるような緊張感、もうすべてを任すといった目だ。ただ、終わった瞬間の、あの解放感だけが待ち遠しいのだろう。

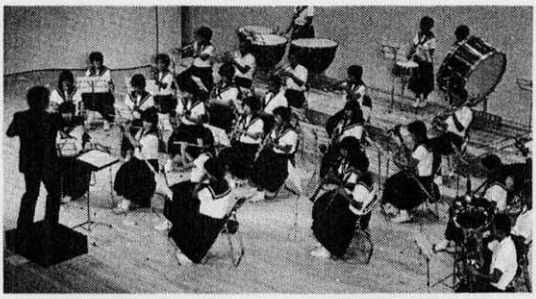
昨年のコンクールのことだ。演奏が終わって一段落したころ、二年生の女子の集団が私を取り囲んだ。何事かな、と思っていると、

「先生、おめでとう。」

と言って、きれいなリボンのついた箱を手渡してくる。誕生日のプレゼントだ。表には、資金を提供した者の名前がずらっと並んでいる。緊張の解けた後ということもあって、とてもうれしかったのだが、現代っ子の大胆さに思わず苦笑してしまった。

今年もまた、私の誕生日とコンクールが重なっている。練習中に、時々この話を持ち出す。

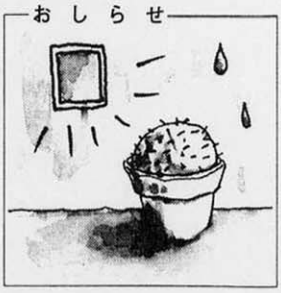
「今年のプレゼントは、金賞がいいなあ。」



練習が始まる。ほめたり、けなしたり、大声が練習室に響く。もちろん、私からの一方的なものであるが、音楽が専門ではない私には、金賞を取るためにどんな指導をしたら良いかを考える技量などない。だから、指示も具体性に欠ける。しかし、子どもたちはそれを何とか受け止めようとしてくれる。

そんな中で、最近よく口にする言葉がある。これができるようになってくれれば、どんなプレゼントより、ずっとうれしいんだが……

「おい、おまえら、もっと色気のある音、出せんのか！」



利用の多い女子中学生

― 心の電話おかざき ―

「心の電話おかざき」は、今月七日で三周年を迎える。

本年四月からは、六人の専任相談員が毎日（日曜・祝日は除く）午後一時より九時までの八時間応対している。

四・五・六月の三か月間における小中学生の相談件数は下表の通りである。

〈相談の内容〉

○小学生の場合

学校生活・友人関係のことで相談してくることが多い。特に弱い者いじめにあって、学校へ行きたくないという子どものいることに注意したい。

○中学生の場合

学校生活・友人関係・男女交際の問題が多い。部活の厳しさについていけない、上級生が怖い、異性への悩みなど。

○小中学生共通した訴えの中に、先生に話しても、聞きっぱなしで、あまり相談にのってくれないという例がある。こうした子どもたちへの配慮も忘れないようにしたい。

心の電話相談件数
（昭和59年4～6月）

相談者／月	小学生 男	小学生 女	中学生 男	中学生 女	計
4月	7	10	9	15	41
5月	11	17	14	27	69
6月	10	9	15	33	67
計	28	36	38	75	177

【寄贈刊行物・資料等】

◆魅せられはたらきかける子
B5　五四ページ　矢作南小

◆わかる・できる・いきいきとした授業を求めて
B5　六三ページ　六ツ美中

◆研究紀要 No.26　岡崎市教委
B5　二八三ページ

◆子どもとつくる楽しい授業
第三集　B5　一一〇ページ
理科授業研究サークル

◆昭59・学級要覧
B5　孔版印刷　特殊教育部

◆研究集録　言語環境を整える
第四集　家族対話の推進
B5　孔版印刷　矢作北小

■昭和五十九年度岡崎市教育研究論文の募集要項

○部　門
第1部門　個人研究
第2部門　共同研究

○字　数
四百字詰原稿用紙（B4判）三十枚以内。表・グラフ・写真は本文に含める。

○提出期限
中間報告　9月5日（水）
研究論文　12月1日（土）

○提出先
岡崎市教育委員会学校教育課

○表　彰
最優秀賞、優秀賞、佳作

■ハンガリー少年少女合唱団演奏会

七月二十六日、市民会館ではハンガリー少年少女合唱団の演奏会が行われた。岡崎のハーモニーも共演。翌日（二十七日）には、六ツ美北部小学校で合唱団との交歓会も開かれた。

■県教育研究論文締切迫る

○字　数　一万二千字以内（B4判原稿用紙）

○提出期限　八月二十八日

○提出先　市教委学校教育課　伊藤主事へ

○表　彰　最優秀賞・優秀賞・佳作・参加賞

○論文表紙には、応募部門、題名、校名、職名、氏名を明記

昭和59年度　夏期実技講習会

教科・領域	期日	場所	人数
書写	8・4	岩津市民センター	50
社会	8・3	六ツ美市民センター	40
算数	8・3	太陽の城	50
理科	8・3	緑丘小学校	60
音楽	8・3	小豆坂小学校	50
図工・美術	8・4	岡崎小学校	80
技術・家庭	8・3	男　城北中学校 女　安城農林高校	30 30
家庭	8・4	婦人会館	40
英語	8・3	大平市民センター	40
特殊教育	8・3	福祉の村「友愛の家」	66
視聴覚（VTR）	8・3～4	広幡小学校	50
図書館	8・3	福岡小学校	40
保健	8・3	愛知県西三河消費生活センター	56
生活指導	8・3	大平市民センター	45
視聴覚（校内放送）	8・6	六ツ美北部小学校	150

刀塚と三本松

所在地―岡崎市欠町

東公園駐車場入口の、都市計画道路をはさんで、西に老松の生えた小さな塚がある。付近の人はここを三本松と呼んでいる。松の根方には、中央に地蔵様、両わきにかなり古いものと思われる仏像が二体、それにお題目石が一基、いつ通っても花の絶えていたことがない。

仏の供養をしておられるのはこの塚の持ち主で、宇野さんといわれる方である。中央の地蔵様は宇野さんの先祖が文政十二年に建てたものだが、あとの二体はいつ建てられたものかわからないそうだ。

この塚の由来は随念寺の文書に記されているという。

戦国の昔、宇野美濃守という武将が戦国の世に見切りをつけ、武具を埋めた塚だそうな。

名は三本松なのに木は一本。実は一本は伊勢湾台風で、もう一本は道路工事で主根を切られ、今は貴重な一本が残っているわけである。昔、ここから東公園の山をぬけて作手道（道根往還）が東へのびていた。松は旅人たちの道しるべであった。

首つり松とか首切り松とか、陰気なあだ名もあるが、よそ者が勝手に付けた名前だとのこと。塚のかたわらに何代目になるか、若松が三本植えてあった。

●カット　竜海中　川上康子

この本を

＊柔らかい個人主義の誕生　山崎　正和
中央公論社　1100

＊自家製文章読本　井上ひさし
新潮社　920

＊子どもの本の作家たち　西本　鶏介
東京書籍　1300

＊泥　芝　居　杉浦　明平
福武書店　1200

＊言葉のしつけ　大岡　信他
小学館　980

言葉のしつけは胎児期から始まると例証してみせたり，幼児期が決定的だと述べてみたり，子どもとつきあう時はずっこけ言葉も使ってもいいじゃないかと言ってみたり，ユニークな論が随所で語られている。

「テレビの無い所で親子対話をはずませよ」「返事を重視せよ」「教壇での言葉を磨け」などの提言には賛成である。

この本は，「日本語のシンポジウム」（朝日ゼミ）の記録である。

オアシス

「親パイプに子（火薬入りの細パイプ）を二十本入れてね。」

金魚花火の製法を語る煙火師。この道一筋に命をかける専門職としての誇りがその表情や手さばきににじみ出ている。

教師たる我々も、同様に、子づくりに命をかける決意を再認識したいものである。

自然がなくなったとはいえ、少し目を向け、耳を傾けると、まだまだいろいろな生き物たちを発見できる。シオカラトンボにカブトムシ、盛夏の代表的な昆虫である。今ごろ、子どもたちは、真っ黒な顔で目を輝かせ、小さな虫を追っていることだろう。

自然と人とが触れ合う季節が訪れた。

朝顔が青く赤く、そのたおやかな花弁は早朝の露に濡れて、ほんの半日の命に心躍らせ、そのひんやりした空気にも打ち震えるあわれさ。はや、秋の訪れを感じさせる。

まもなく立秋。

夏休みも終盤へと回転数を上げている。心なしか、蟬の声も慌ただしい。

〝涼し〟が夏の季語であることを最近知った。昔と今とさほど夏の暑さに違いはないと思うのだが、昔の人人が目や耳からも涼を感じ、暑い夏を楽しんでいたことに今更ながら驚かされる。風鈴の音、蛍狩り、怪談、水中花……

夏に弱い人間になっていることを嘆かわしく、情けなく思うこのごろである。